

秋の研修 青塚古墳と犬山城を巡る

30 秋の研修会は 5 月の今城塚古墳、9 月のしだみ古墳群に引き続き、国史跡「青塚古墳」と犬山城の見学をしました。帰りは大縣神社と田縣神社にも立ち寄りました。

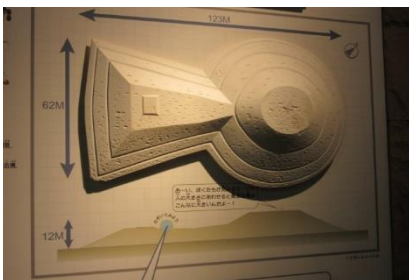
1 愛知県 2 番目の規模「青塚古墳」

8 時 50 分頃に資料館を出発して、10 時 10 分頃青塚古墳史跡公園に到着しました。この古墳は名古屋市の段夫山古墳につぐ愛知県内第 2 位の規模で、国の史跡に指定されています。所在地は犬山市青塚で、西には木曾川の流れが作った扇状地が一段低く広い平野が広がり、標高 31m の台地上に築かれています。犬山市が 5 年がかりで一帯を整備し、史跡公園として 2000 年にオープンしました。



青塚古墳は、今から 1.650 年前(西暦 350 年前後)につくられました。しかし、だれが眠っているのか謎です、が、この地域を治めていた王の墓だと考えられています。古墳の形は前方後円墳で、丸い後円部と四角い前方部で構成されています。大きさは全長 123m、高さは後円部 12m・前方部 7m です。

ここの特徴は離れて眺めるだけの余裕があり、全体を見渡せることが出来るので、古墳の形やスケール感を感じることが出来ます。発掘の結果、この巨大な古墳がすべて土を盛って造られたことが分かりました。古



墳に上ると御嶽山がよく見えるそうですが、上ることは許されていません。というのも近くの大縣神社の神域だからと言います。広場の芝生に取り囲まれた中に横たわるような古墳は、上ってみたいくなるような高さで、所々にススキの穂やコスモスの花もちらほらしていました。裏手には池がありガマの穂も残っている、散策するにはとても落ち着くコースです。

① 卑弥呼の鏡は魔鏡

公園の一角にこじんまりとはしているがなかなか立派な資料館があり、青塚古墳のいろいろが展示されています。その中で記憶に残ったことは……

三角縁神獸鏡がいくつか展示されていましたが、いずれも鏡面ではなく鏡の裏側の文様が見えるように並べられていました。鏡なのに何故裏側ばかり見えるようにしているのか不思議でした。つまり、昔の鏡はどのくらい明るく映し出すことが出来たのか、と思うからです。数人で議論となりましたが、だれも納得できる説明ができませんでした。この三角縁神獸鏡は中国で作られたという説と、日本で作られたという説があり、ふちの断面が三角形になっているもの。裏側に神と獣が描かれていることからこのように呼ばれています。

しかし、館内を回っていてその理由が分かりました。新聞記事が大きく伸ばして掲示されていたのは、犬山の古墳から出土した三角神獸鏡を調べた京都国立博物館の村上隆さんの研究発表でした。その内容によると、この鏡に太陽光を当てて反射させたところ、裏側の絵が映し出されるいわゆる魔鏡だったことが確認されたというのです。それで、いろいろな文様がわかるように展示されていたのです。

② 小牧長久手の戦いでは砦だった

青塚古墳は1584年の「小牧長久手の戦い」の時に、秀吉軍が青塚砦として利用しました。森長可が守備していたと言われていています。ここから南の方角には、小牧山城が見えます。

今年見学した3か所の古墳はそれぞれ特徴があり、今城塚古墳はあまり広すぎてその全貌を目で確かめることが出来ませんでした。しかし、古墳の中を自由に歩いて目で見ることが出来たことが特徴でした。しだみ古墳群はメインの古墳に登れるように手すりが設置されていました。それに対しここ青塚古墳は神様の領域ということで、自由に歩き回れないことが特徴と言えます。

東浦においても天白遺跡の調査が行われましたが、調査後は元通りに戻されました。せっかく確認することが出来たのに残念でもあります。

2 国宝犬山城の天守閣に上る

次に立ち寄ったのは犬山城です、ここはみなさん立ち寄ったことがある場所でしょうけれど、お城というのは何度訪れても新鮮な気分になります。それに、個人の所有物だったことがあるとか、現存する天守の中で最も古いことは良く知られており、話題に事欠きません。

① そんな犬山城の歴史

天文6年(1537)	築城	信長の叔父織田信康によって木之下城より城郭を移し築城
永禄8年(1565)	織田信長が攻略	信長は従弟の犬山城主織田信清と対立、一族の領地争いで攻略
天正9年(1581)	織田信勝入城	信長の四男勝長が城主に
天正12年(1584)	豊臣秀吉入城	秀吉対家康・信長の次男信雄との間で「小牧・長久手の戦い」秀吉軍の池田恒興が城内に侵入し落城。後に秀吉が入城。
慶長5年(1600)	関ヶ原前哨戦	関ヶ原の前哨戦で西軍方の武将たちが退去し、東軍が占拠
元和3年(1617)	成瀬氏犬山城拝領	徳川家康の重臣成瀬正成が拝領。この時天守に改良がくわえられ、現在の姿に。以後、成瀬家が幕末まで城主を務める。
明治6年(1873)	天守以外一部取り壊し	一部の建物は取り壊されたり、払い下げられたりしました。
明治24年(1891)	濃尾大地震で天守半壊	マグニチュード8.4の濃飛大地震により天守は半壊。同28年に修理を条件に愛知県から旧藩主の成瀬家に譲与されました。
昭和10年(1935)	国宝に指定される	天守は国宝に指定されました。犬山城は国宝4城(犬山城、松本城、姫路城、彦根城)の中で最も古いとされています。
平成16年(2004)	犬山市が管理	4年間にわたる解体修理が昭和40年に完了。全国唯一の個人管理から、財団法人犬山白帝文庫の所有となる。

このような歴史をたどった犬山城は、なんといっても大河木曾川のほとり小高い山の上に建てられた

「後ろ堅固の城」で、天守閣最上階からの眺めはまさに絶景です。江戸時代の犬山城は中山道と名古屋道に通じ、真下を流れる木曾川による交易の要衝として栄えました。幾多の戦乱では三英傑がこの城を奪い合い、以降、震災などの歴史の荒波をくぐり抜けてきました。



犬山城天守閣と天守閣から木曾川の眺め

② 天守閣に上り思ったこと

天守閣に上るため靴を脱いで上がると、そこにはとても太い丸太が横たわり、その大きさに驚きます。土台となる石垣も見えており、高さは5mで自然石をほとんど加工しないで積み上げた野面積みです。この材木を見て思い出したことがあります、先日のニュースで興福寺再建に使われた柱は、アフリカのカメルーンから輸入したといます。そんなことを話していたら、どこそこの柱も台湾から輸入したとか…今日では歴史ある建物を維持するために、国産材では間に合わない現実に直面しています。生活の成り立ちはその土地で採れる食物はじめ、原材料があってこそ成立してきました。今日のようにお金を出せば何とかなる、という風潮は改めていかなければなりません。

四階の望楼からの眺めは素晴らしいの一言に尽きます。川があり街があり、山がある美しい風景はいつまでも守っていききたいものです。その四階には廻り縁があるのですが、手すりの高さが少し低くて落ちないかと少々不安になります。それと、その床は外側に向かって傾斜がついており、雨水が流れやすくしてあります。細かな所にまで配慮がなされているのに感心します。

もう一つ気になったことがあります、それは瓦がどのように固定されているのかです。平瓦の上に押えるみたいにして半円形の瓦が美しく並んで、それも平瓦と平瓦の間にはすべてあります。だから平瓦を抑える役目と思うのですが、その瓦自身の固定はどのようにしているのか…? よく見ると所々に銅線で縛っているのが分かりますが、その程度で良いものなのか? 先端の瓦には犬釘の頭のようなものが見えており、これでしっかり固定している事が分かります。でも、両端から押していて端っただけが固定されているだけで大丈夫なのか…? 台風などにも飛ばされないのはどんな理屈なのか、今の私には分かりません。でも大昔の人はそのことを理解していたのだろう、と、すれば頭いい!!

3 どんでん館・城とまちミュージアムの見学

お城見学のあと、街の中をぶらりと歩いて三つの施設を見学しました。はじめに一番遠くにある「どんでん館」へ向かいました。ここは国宝指定重要無形民俗文化財の犬山まつりで曳かれる「車山(やま)」13輛のうち4輛を展示しています。犬山の祭りの花形である「車山」は「やま」と呼ばれます。そもそ

も犬山まつりは寛永12年(1635)から伝わる針綱神社の祭礼で、4月の第一土・日に行われます。

13輛の車山が豪華絢爛な刺繍を施した水引幕を揺らして、錦絵さながら市中を練り歩きます。車山にはからくり人形が据えられ、笛や太鼓に合わせて演舞を披露します。そして365個の提灯がともされ、まつりに彩を添えます。



ところで「どんでん」とはどんな意味かと言うと、車山が城下町の辻で豪壮に方向転換する様があります。これを「どんでん」と呼んでおり、この施設の愛称はこの言葉に由来しています。館内をゆっくりと見学しましたら、車山にはさほど驚くことはなかったのですが、2階にミニチュア模型で街中に行く車山が並ぶ模型がありました。なかなか精巧にできていて素晴らしく、しかもこの車山が移動して行くのです。これは見ていてもほっこりしました。

つぎに「からくり館」を見学しました。ここでも思ったことは、昔の人は頭が良かったということです。からくりを考えるにはどのような手順で行ったのか、あるいはそのヒントはどのようにして得たのかなど…さらには小さな歯車を造る技術にしても、どのようにして得たものなのか。でも、名前は忘れてしまいましたが、名人の工房のセットが作られていてそこには普通のノミが並べられていました。

次に城とまちミュージアムに行きましたが、ここは犬山城白帝文庫の資料を常設展示するとともに、

テーマを設けて企画展・特別展を行っています。設立の経緯は、犬山城の所有者であった成瀬正俊が文化財の公開・保存の観点から国宝天守とともに伝来の武器・武具・絵画・工芸品・古文書目録などを一括寄付したことによるものです。

成瀬家は三河国加茂郡足助庄成瀬郡(今の愛知県豊田市)より出て、松平家(後の徳川家)に属していました。その後、徳川家康が信頼する側近の一人であった成瀬正成は、政権を支える年寄りを務めるとともに家康の9男義直(尾張徳川家初代)の付け家老を命じられました。元和3年(1617)に2代将軍秀忠から犬山城を与えられ、明治維新まで成瀬氏9代が城主を務めました。

この展示で目を引いたのは、落雷により取り換えられた天守閣の鯨です。ちょうど尻尾の部分から折れていました。でも避雷針はどこに取り付けられていたのでしょうか、それらしい取り付け跡は見られなかったです。そして、鯨についての説明では、頭がトラで体が魚という想像上の生き物で、海の水を一気に飲み干すと言われているとか。作者は瓦師の高山市郎兵衛・市郎右衛門とありましたが、鯨については初めて知りました。

もう一つは金ぴかの犬山城の模型が展示されていましたが、31年ぶりに公開されたとか。でも何の説明もありませんでした。犬山以外からの人も多いはずなのにどうしてでしょう、金ぴかのお城を展示するなら何かしらの説明があつてしかるべきと思うのですが…

4 大縣神社と田縣神社に立ち寄る

14時に犬山を出て次に大縣神社と田縣神社に寄りました。



大縣神社…ご祭神は大縣大神

尾張開拓の祖神「大縣大神」を祀る尾張最古の神社。延喜式神明帳には名神大社として記載され、尾張国の二宮様として親しまれています。また摂社の「姫の宮」は女性の守り神、安産、子授けの神様として有名。ここで言う摂社は、現在では小規模神社の呼称として用いられています。昔はいろいろ決まりがあって、ご祭神と関係のある神や地主神など、これに当てはまらないのが末社と呼ばれていました。



田縣神社…ご祭神は御歳神・玉姫命。

五穀豊穰と子孫繁栄の祖神として崇められています。式内小社で旧社格は郷社です。拝殿の前に立つと大きな男性のシンボルが目に飛び込んできます、休憩場には祭りの写真が展示されていました。何といても天下の奇祭として知られる、豊年祭は毎年3月14日に執り行われ、直径60cm長さ2m50cmの大男陰茎(おおおわせがた)を厄男たちが神輿に担ぎ、御旅所から行列をなし奉納し、五穀豊穰、万物育成、子孫繁栄を祈願する祭りです。



しかも、大男陰茎(おおおわせがた)は毎年3月3日に「斧入祭」に新しく造るといいます。樹齢200年～250年の木曾ヒノキが使用されます。よく分からないのは五穀豊穰を祈るのに、何故大男陰茎(おおおわせがた)が登場するのかです。ネットで神社のホームページを見るとこんな説明がありました。ある時稲がイナゴに食べられてしまい米がとれませんでした、その時、御歳神が村人たちに「糸巻・麻の葉・烏扇などと共に男徑を用いたイナゴ除けのまじないを

教えました。すると稲は緑色を取り戻し、田は豊作になった」といいます。この故事に倣いまつりの形が出来上がったようです。が、ほんとでしょうか？ 後から創作したのでは…

今回の研修もいろいろなことを学ぶ良い機会となりました。